

# み と せ の 懸 想

— とは ず が た り 覚 書 —

三 角 洋 一

(人文学部国文学研究室)

## Three Years' Yearning

— Notes on "Towazugatari" —

Yoichi MISUMI

### 1. み と せ の 懸 想

『とはずがたり』<sup>(1)</sup>には、一人の女を三年間思い続けたという話が二話ある。ひとつは後深草院の漁色の一挿話、扇の女・ささがにの女の話である。

さてもをととしの七月に、しばし里に侍りて参るとて、うらうへに小さき洲流しをして中綴なる紙に水を描きて、異ものは何もなく水の上に白き泥にて「くゆる煙よ」とばかり書きたる扇紙を、上木の骨に具して張らせにある人のもとへ遣はしたれば、その女のこれを見て、それも絵を美しう描く人にてひた水に秋の野を描きて「異浦にすむ月はみるとも」と書きたるをおこせて、扇かへにしたりしを持ちて参りたるを、さきざきの筆ともみえねば「いかなる人の形見ぞ」などねんごろに御尋ねあるもむつかしくてありのままに申すほどに、絵の美しきよりはじめうはの空なる恋路に迷ひそめさせ給ひて、三年がほどとかくその道芝いしいしと御心のいとまなくいひわたり給へるを、いかにし給ひけるにや、神無月十日余日のほどに参るべきになりて、御心のおき所なく心殊に出で立ち給ふところへ、賚行の中將参りて「承り候ひし御傾城具して参りつる」よし案内すれば、「しばし車ながら京極おもての南の端の釣殿の辺におけ」と仰せありぬ。初夜打つほどに、三とせの人参りたり……(巻二・276~7頁)

院は三年間言い寄り続けた扇の女とようやく契ったものあきたらず、はちあわせして雨中捨ておかれた傾城(ささがにの女)は身を恥じて行方知れずになったという。いまひとつは、貴僧有明の月(性助法親王)の作者への恋の思いが三年間やまなかったという話である。院は二人の仲を知るとこれを許し、作者が有明の胤を宿すのを待って有明にこれを告げる。有明は謝して、

まことに前業の所感こそ口惜しく侍れ。かくまでの仰せ今生一世の御恩にあらず。世々生々に忘れ奉るべきにあらず。かかる悪縁にあひける恨み忍びがたく、三年過ぎ行くに思ひ絶えなんと思ふ。念誦・持経の祈念にもこれより外のこと侍らで、せめて思ひのあまりに誓ひを起して、巻書をかの人のもとへ送り遣はしなどせしかどもこの心猶やまずして、又廻りあふ小車の憂しと思はぬ身を恨み侍るに、さやうに著きふしきへ侍るなれば若宮を一所わたし参らせて、我は深き山に籠りて濃き墨染の袂に成りて侍らん。(巻三・326~7頁)

と語ったという。前者の場合には、女房でも傾城でもない扇の女ははしたなく容易にはなびかなかったのであり、院も誠意をみせて長い間心変りせず言い寄り続けたということであろうし、後者の場合には、有明は時がたてば作者への恋心も消え失せようと念じていたが、ついに恋の炎を消すことができなかつたと告白しているのであろう。いずれの場合も、たんに事実としての時日の経過をいっているだけのように見えるが、その奥には当時の社会の習俗が横たわっているのであって、もっと大きな意味がなわされていると思われるのである。これをいま私に「みとせの懸想」と名づ

けておきたい。

「みとせの懸想」をしいて分類すると、錦木型・「あらたまの年の三年」型・「三年漕ぐ」型・その他となるようである。順に見ていくと、錦木型は『俊頼髓脳』<sup>(2)</sup>にある伝説がもととなっている。

錦木はちつかになりぬいまこそは人にしられぬねやのうち見め

あらてくむやどにたてたる錦木はとらずはとらずわれやくるしき

錦木とはみちのくにに男、女をよばはむと思ふ時消息をやらで、たき木をこりて日ごとに一束その女のかどのほどに立つるを、遇はむと思ふ男の立つる木をば程なくとり入れつれば、その後は木をば立ててひとへにいひよりて親しくなりぬ。遇はじと思ふ男の立つる木をばいかにもとり入れねば、千束をかぎりにして三年立つるなり。それなほとり入れねば思ひ絶えてのきぬ。この木を錦木といへることは、狛針の棹のやうにまだらに彩りて立つればいふなり。(134~5頁)

男の求愛期間は錦木千本、三年とかぎられていたといい、女には拒絶することもできたというが、男の熱意に根負けすることもあったであろう。能にも『錦木』の曲が作られており、あるいは『通小町』の深草少将の百夜通いの趣向も一種の変奏曲といえることができる。

「あらたまの年の三年」型は、いうまでもなく『伊勢物語』<sup>(3)</sup>天福本・二四段に由来している。

むかし、男かたるなかにすみけり。男宮仕へしにとて別れ惜しみてゆきにけるままた、三年来ざりければ待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に「今宵はむ」とちぎりたりけるに、この男来たりけり。「この戸あけ給へ」とたたきけれどあけで、歌をなむよみていだしたりける。

あらたまのとしの三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ

といひいだしたりければ……(158頁)

夫が家を出て三年間消息不明だったので、妻は「ねむごろにいひける人」に心弱く改嫁を約したところ、夫が無事戻ってきたというのである。これをふまえた話としては、『平中物語』<sup>(4)</sup>に、

また、この男いひみいはずみ物いひすさぶる人ありけり。さのみ物はかなくてありわたる、おのづから年月経にけり。男音せねば、女のもとより霜月のついたちの日ひたる、「年はいくとせにかなりぬる」といひたるに、あやしがりて数へければ三年といふついたちの日にぞありける。

いにしへのことのたとひのあらたまの年の三年に今日こそはなれ  
返し、

古りにける年の三年をあらためてわが世のことと三千年を待て

男……(三二段・523~4頁)

とある。風流な女がその気がないでもない男に対して、あなたは三年の胸を積んで下さいましたが、もし今も私を思うのでしたら、西王母の桃よろしくあと三千年お待ちになって下さい、といったのである。また、『後撰和歌集』<sup>(5)</sup>恋五・九七〇~二に、

返りごとせぬ人につかはしける

打ちわびてよばはむ声に山びこのこたへぬ空はあらじとぞ思ふ

返し

山びこの声のまにまにとびゆかばむなしき空にゆきやかへらん

かくいひかよはずほどに、三とせ許りになり侍りにければ

荒玉の年の三とせはうつせみのむなしきねをやなきてくらさむ

という「読人しらず」の贈答があり、『千載和歌集』<sup>(6)</sup>恋五・九一五・中院右大臣(源雅定)の歌に、

花園左大臣（源有仁）の家に侍りける女に伊予と申しける、まだ中納言など申しける頃物申しわたりけるを、離れ離れになりければ、思ひや絶えにけん、前山城守なりける者に物申すと聞きていひ遣はしける

まことにや三年も待たで山城の伏見の里に新枕する

かくいひて侍りければ、あへなくかの男逢はずなんなりにけるとなん  
というのがある。前者は年功を積んでも迎え入れられぬ男の嘆きであり、後者は雅定が前夫気取りで新しい男を妨げた話、伊予にしてみれば愛人関係を清算して夫を迎えたのに邪魔立てされた話、とはいえ風流佳話であるということなのであろう。

「三年漕ぐ」型というのは『平中物語』に載る話である。

また、このおなじ男この二年ばかり物いひすさぶる人ぞありける。いかでなほ対面せむ、といふ心ぞせちにありける。返りごとに、女かくなむ。

わたつづみの底に生れたるみるめをば三年漕ぎてぞ海人は刈りける  
男返し、

うらみつつ春三返りを漕がむ間に命堪へずはさてややみなむ  
かかるほどに……（四段・473～4頁）

また、『古今和歌六帖』<sup>(7)</sup> 三・水（舟）・三二六七三に沙弥満誓の歌として、

みづの江の浦島の子がつり舟もおなじ浦にぞ三とせこぐてふ

が伝えられている。浦島伝説において「三年」というのは亀媛とくらしした歲月のことであるから、みるめの生育には三年かかるので、海人の浦島の子も三年がかりでようやくみるめを刈ることができるのだ、というのであろう。しかしどうも、この「三年漕ぐ」型には何か伝説・物語がもとにあったように思われてならないのである。たとえば、『袖中抄』<sup>(8)</sup> 二・いそなつむめざしの項に、

或物語云、

紀伊国のなぐさの浜にかひひろふあまのめざしのおとななりせば（41頁）

とある物語はどうであろうか。この荒筋は『大和物語』<sup>(9)</sup> 一六九段（425～6頁）、『伊勢物語』一二二段（232～3頁）、『袖中抄』一三・ゐでの玉水の項（210～1頁）にうかがえる、いわゆる井手の下帯の物語に近かったものと思われる。男が女の成人する三年後を約して別れ再会した物語であるか、半年か一年後を約しながら延びて三年後に再会したものか不明であるが、もし後者であるとすれば、あるいは『和歌童蒙抄』<sup>(10)</sup> 三・石の項に、

頼みつつがたき人をまつほどに石に我が身ぞ成りはてぬべき

『しららの物語』の第二にあり。しららの姫君、男の少将のむかへにこんと契りておそかりしを待つとてよめる也。（171頁）

とある『しらら』に関係づけられようか。名草と白良とでは離れすぎているようにも思われる。それともやはり、海人男が貴女に恋をして三年後に思いがかなえられた、というような伝説を想定したほうがよいであろうか。物語・伝説のことはともかく、『平中物語』『古今六帖』の歌は、懸想する男に三年の年功を積みなさいといいやったものである。

その他としては、まず『竹取物語』<sup>(11)</sup> があげられる。片桐洋一氏はその解説において、五人の貴公子の求婚譚は三年の杵をもって、石作の皇子とくらもちの皇子の話に明記されていること、帝の求婚（とかぐや姫の昇天）の部分にも三年の杵があること、を指摘している。『古今六帖』四・恋（雑の思ひ）・三三〇二三に、

をととののさいつ年より今年まで恋ふれどなどかいもにあひがたき

とある歌も、「みとせの懸想」がかなわず無為に四年すごした嘆きと見ることができる。また、『唐物語』<sup>(12)</sup> 第七話がある。

むかし、宋玉ときこゆる人、かたち姿世にたぐひなくざえ才学ならびなかりけり。この人すみける東のとなり、又世にたぐひなく美しき女ありけり。この宋玉をいかでもと思ふ心の忍びがたさに、東の垣に夜屋たちそひてうかがひけれど、みとせまで目をだに見やらざりければ、恋ひわびてつひに逢ふことしらぬ涙にしづみはてにけり。

恋ひわびてみとせになりぬ花がたみ目ならぶ人の又もなければ(9頁)

さらに、『源平盛衰記』<sup>(13)</sup> 十六・菖蒲前の事の条には、

或時頼政菖蒲を一目見て後は、いつも其の時の心地して忘るる事なかりければ、常に文を遣はしけれども一筆一詞の返事もせず。頼政こりずまに又遣はし遣はしなんとする程に、年も三年になりけり……(中略。鳥羽院ノハカライデ、頼政ハ三人ノ美女ヲ前ニ「いづれか菖蒲」ト詠ンデ菖蒲ヲ得ル)……実に頼政と菖蒲とが志、水魚の如くにして無二の心中なりけり。三年の程心ながく思ひし情の積りにやと、やさしかりし事どもなりければ……(556~8頁)

とある。なお、『源氏物語』<sup>(14)</sup> について見てみると、頭中将が三年間通った夕顔を北方が迫害する(夕顔・272頁)、罪した人は三年は召しかえさず(明石・189頁)、螢宮は北方亡きあと三年間やもめ住み(胡蝶・152頁)、薫は宇治八宮に三年通って初めて姉妹の琴を聞く(橋姫・222頁)、宇治中君は匂宮と結ばれて三年後妊娠により世間からも重んぜられる(宿木・210頁)とあるほか、「三十年よりあなた」として朝顔齋院の父宮逝って三年(朝顔・28頁)、落葉宮の母御息所逝って三年(夕霧・64頁)の例がある。参考までにあげてみた。

ここまで見てきたように、「みとせの懸想」の習俗は女の側からいえば、好きでもない男に気をもたせるようにあしらったり、男の熱意や誠意を見届ける口実としたり、男に根負けして身をゆだねるひとつの目安としたりできるものであったと考えられ、男の側からいえば、ほかの女に目移りしないで三年の年功を積むことによって、いちおう女に決断をせまることができるとされたといえそうに思う。『とはすがたり』の二つの場合も、院の誠意を見て扇の女も力無く従わざるをえなかった、有明は作者への破戒の思い・ふるまいを三年間断念することができず、「悪縁にあひける恨み」とはいえ「前業の所感」と思わざるをえない、と読みとるべきところであろう。

## 注

- (1) テキストは次田香澄・日本古典全書『とはすがたり』朝日新聞社・第9刷による。引用にあたっては、私意をもって表記を改めたところがある。他の引用についても同様である。以下、次田氏「解説」として引くのも同書である。
- (2) テキストは日本古典文学全集『歌論集』小学館所収、橋本不美男『俊頼髓脳』による。
- (3) テキストは福井貞助・日本古典文学全集『伊勢物語』小学館による。
- (4) テキストは清水好子・日本古典文学全集『平中物語』小学館による。
- (5) テキストは大阪女子大学国文学研究室『後撰和歌集総索引』の天福本による。
- (6) テキストは久保田淳・松野陽一『千載和歌集』笠間書院による。
- (7) テキストは『続国歌大観』による。
- (8) テキストは久曾神昇『日本歌学大系』別巻二・風間書房による。
- (9) テキストは高橋正治・日本古典文学全集『大和物語』小学館による。
- (10) テキストは注(8)書・別巻一による。
- (11) テキストは片桐洋一・日本古典文学全集『竹取物語』小学館による。
- (12) テキストは池田利夫『唐物語校本及び総索引』笠間書院による。
- (13) テキストは『校註日本文学大系』第十五巻・国民図書による。
- (14) テキストは池田亀鑑・日本古典全集『源氏物語一(〜七)』朝日新聞社による。

## 2. のがれぬ契り

『とはすがたり』の作者は有明の月との関係について、くりかえし「これやのがれぬ契りならむ」(巻三・319頁)「これのがれぬ契りとかやならん」(同・328頁)といっている。後深草院との「の

がれぬ御契り」(119頁)に対するもの、また雪の曙との「心の末」(190頁など)を頼みとする関係、近衛大殿との「御めのと」(313頁)の関係に対するものとして注意しなければならない。宿世観にもとづく男女の縁が「のがれぬ契り」なのであって、少なくともかりそめのあだなる関係とは区別されていたに違いないのである。あるいは、「これやのがれぬ契りなりけむ(なるらむ)」といったふるごとが伝えられていたのかもしれないが、ここでは物語の中からいくつか例を拾ってみておきたい。『源氏物語』総角巻、薫の策略によって匂宮が中君と契ったことを知った大君は、これも宿世と中君を世話し慰める。

- ① 世の中に久しくもと覚え侍らねば、明暮のながめにもただ御事をのみなむ心苦しく思ひきこゆるに、この人々(老女房達)もよかるべきさまの事と聞きにくきまで言ひ知らすめれば、年経たる心どもには「さりとも世のことわりをも知りたらむ。はかばかしくもあらぬ心ひとつを立ててかくてのみやは見奉らむ」と思ひなるやうもありしかど、ただ今かく思ひもあへずはづかしき事どもに乱れ思ふべくはさらに思ひかけ侍らざりしに、これやげに人の言ふめるのがれ難き御契りなりけむ。いとこそ苦しけれ。少しおぼし慰みなむに知らざりしさまをもきこえむ。にくしとなおぼし入りそ。罪もぞえ給ふ。(54頁)

『夜半の寝覚』<sup>(15)</sup> 卷一、男主人公中納言はたまたま女主人公中君を見だし、但馬守の三女と思い違いして、これに言い寄っている宮中将といつわって契る。中君の御相手役の対君はにせ宮中将を見送りに出ながら、中君の将来を思う。

- ② 「人がらは同じゆかりに賤しかるまじけれど、この御程よりは位のおさき」と思ふにしみじければ、「このきははさ思はせて、またおのづからかばかりの御契りは、つひにのがれ給はざらんをばいかかはせむ」と涙おちぬれど… (58頁)

『御津の浜松』<sup>(16)</sup> 卷一、男主人公中納言は父宮の生れかわり唐の御三皇子を尋ね、母后にあるまじき恋をして山陰である女と一夜契る。帰国間際、中納言は後の側近女王君の里を探しあて、后である女が若君をもうけたことを知り、后とひそかに対面できるよう責めわたる。

- ③ この世(唐土)に侍らんことただしばしなり。今一度きこゆべき事一言なん侍るを。(后ト) 知りながら好きずきしきあやまちならばこそ罪も負ひ侍らめ。菊の花御覽せしゆふべより、またいかで見奉らんとばかり心にしめて思ひわたり侍りしかども、かうまでは思ひかけずのがれがたき契りのほどさりともおぼし知るらんを、この世にかくてめぐらひ侍らんほど今一度きこえさせん。(204頁)

同じく『御津の浜松』卷二、帰国した中納言は、かつて式部卿宮と婚約中を契った左大将の大君が姫君をもうけて出家したことを知り、帰京ののち左大将と再婚している母君や問題の姫君と対面し、母君に義父左大将・大君を嘆かせた罪をわびる。

- ④ 殿などいかに好きずきしう乱れがはしき様におぼし召されけん、とかぎりなういとほしう思ひ給へてなんあさましさも殊にまさられ侍れど、かばかりのしるしを御覽せん人は、さきの世のさるべき契りといふものがれ難きわざに少しはゆるし給ひてましを、あらぬさまにいとひ背き給ふに、数ならぬ身のことわりに罪さりどころなく。(242頁)

『狭衣物語』<sup>(17)</sup> 卷二上、義妹源氏宮を慕う狭衣大将は女二宮との縁談がととのったのちも気乗りがしないうでいたが、たまたま女二宮の部屋にしひび入った機会に一目見てそのまま契ってしまう。

- ⑤ いかばかりにては後行末のたどりもさすがに心強うえ思したとるまじう乱れたるやうにて、消え入りぬべう思し惑ひたる御有様の心苦しきもいかなりにけむ、「これやさは遅れ難き契りの程ならむ」と思ふも、様々に(源氏宮・女二宮双方=対シテ)おろかなるべき志とは覚えぬにしも胸騒ぎて、思ふままにえ見奉らざらむ事の嘆かしう、さりとして今一方に上の御気色に従ふべき心地もせずなど、いとど乱れまさりぬる心の中なほなほ我ながらもどかしう悔しきに、この御

気色さへいといみじきをとかく慰め奉りて……(291頁)

このように見てくると、「のがれぬ契り」は思いがけず契ることになってしまった関係(①②③④⑤)、男や女の将来を定めたり(①②⑤)、子をなしたり(③④)する関係、因縁ある相手と結ばれる関係(③⑤)をいうものようである。それも、事実としては后や皇女の密通であったり(③⑤)、次期春宮というような人物のからむ関係であったり(①④)、なんらかの意味で身分差・禁忌が横たわる異常な関係であるといえそうである。物語の作者達は恐らく、男女主人公や主要登場人物の人生や役割をおおよそ構想したうえで、恋愛事件の場面で「のがれぬ契り」となることばを用いたのに間違いあるまい。

『とはすがたり』の作者は先行の物語に多くのものを学んでいる<sup>(18)</sup>。この「のがれぬ契り」なることばも、説教・説話の方から学んだだけでなく、やはり物語を読んで体得したものと思われるのである。我が人生の歩みを一貫したものとして回想し物語ろうとする時、作者の目には後深草院との「のがれぬ御契り」と有明の月との「のがれぬ契り」がはっきり見定められていたと思う。院との関係はさておいて、有明との関係については、運命的としかいいようのない偶合が度重なったこと、仮称「法師に近づく物語」ともいべき仏教説話に呪縛されたことなど、「のがれぬ契り」であるゆえんが丹念にかたどってあるのである。さきに見た、「三年過ぎ行くに思ひ絶えなんと思」うに「この心猶やまず」という作者への「みとせの懸想」も、有明の側から「のがれぬ契り」であるゆえんをいったものと考えられるのである。

有明の月との交渉の一部始終については、いまは拙稿「『とはすがたり』前篇の構成と意図」(ミメーシス・第4・5号・49年9月)に譲ることにして、まずはじめに、有明における「のがれぬ契り」のさまをかぞえててみよう。巻二の第一年、後白河院御八講結願の三月十三日に有明は「故大納言(作者父中院雅忠)が常に申し侍りし事も、忘れず思し召さるる」(268頁)と、作者の心を引きつけておいて初めて恋をうちあける。亡父にまつわる昔語りをして言い寄ったこと<sup>(19)</sup>、「まことにいつはりならず見ゆる御袖の涙」(269頁)をたたえていたこと、このふたつのことが作者に法師に近づく用心を怠らせ困惑をもたらしたのであるが、これを有明に引きつけていけば、「のがれぬ契り」のしるしであったといえるように思う。有明の純情一途の恋は、作者とひそかに契るようになってのちの「おなじ心にだにもあらば、濃き墨染の袂になりつつ深き山にこもりゐて、いくほどなきこの世に物思はでも」(275頁)とのことばにも示されており、作者の叔父善勝寺隆頭に仲介を頼んで出雲寺辺で逢った折に絶交され、恋を断念するむね書き送った起請文の「髪を剃り衣を染めてのち、一つ床にもゐ、もしは愛念の思ひなど思ひ寄りたる事なし。この後又あるべからず。(私ガ)我(作者)にもいふ言の葉はなべて人(他ノ女)にもやと(隆頭ガ)思ふらんと思ひ、大納言(隆頭)が心中返すがへすくやしきなり」(284~5頁)との文面にもあらわれている。女色に惑うのはあとにもさきにも作者への恋だけであるといい、同じ起請文の中で、

いかなる魔縁にか、よしなき事ゆゑ今年二年、夜は夜もすがら面影を恋ひて涙に袖を濡らし…(中略)…さりとも同じ心なるらむと思ひつる事みな空し。この上は、文をも遣はし言葉をも交さんと思ふ事、今生にはこの思ひを断つ。さりながら、心の中に忘る事は生々々々あべからざれば、我さだめて悪道に落つべし…(中略)…一期の間修するところみな三悪道に回向す。この力をもちて今生長く空しくて、後生には悪趣に生れあはむ。(284頁)

ともいうのである。さらに、有明の真情は隆頭や院の心をも動かしたようであり、隆頭は作者が女楽事件で出奔したことを案じる有明について、「とばかり物も仰せられで、御涙のこぼれしを袷扇にまぎらはしつつ、『三界無安猶如火宅』と口ずさみて出で給ひしけしきこそ、常ならん人の恋し悲しあさましあはれと申しつづけん衰れにも、猶まさりてみえ侍りしかば、本尊に向ひ給ふらん念

誦も推しはかられて」(297頁)と語っている。巻三にはいって、このようないきさつののち二人の関係が院の知るところとなるが、院はこれを許して作者に「まことに不思議なりける御契りかな。さりながら、さほどに思し召しあまりて隆頭道芝せさせられけるを、情なく申したりけるも、御恨みの末も返すがへすよしなかるべし」(316頁)と語り、有明に対しても「忍びがたき御思ひ前業の感ずる所と思へば、つゆいかにと思ひ奉ることなし」(326頁)といいきっている。「のがれぬ御契り」の院は作者をそそのかし、有明の胤を宿したことを確かめたのち有明に告げて許したのであったが、有明はこれを謝して「まことに前業の所感こそ口惜しく侍れ…(中略)…かかる悪縁にあひける恨み忍びがたく、三年過ぎ行くに思ひ絶えなんと思ふ…(中略)…せめて思ひのあまりに誓ひを起して、巻書をかの人のもとへ送り遣はしなどせしかども、この心猶やまずして……」(326頁)と述べたのであった。作者から絶交され、みずからも恋を断念する起請をしたものの、「なほ身にかふべきにや。同じ世になき身になし給へとのみ申すも、神も受けぬみそぎなればいかがはせん」(318頁)という、「みとせの懸想」をつらぬくことになってしまったのである。

いまひとつ、有明が「のがれぬ契り」にすすんで生命を燃やすところをあげてみよう。「かたはらやみ」が流行するさなか、有明は生き急ぐように足しげく作者のもとを訪い、ついに最後の訪問となってしまう時のことである。有明は、

形は世々に変るともあひ見ることだに絶えせずは、いかなる上品上生の台にも共に住まずは物憂かるべきに、いかなる藁屋の床なりとも諸共にだにあらばと思ふ。

といい契り、かつて絶交・断念し作者が女楽事件で出奔した時のことをかえりみて、

憂かりし有明の別れより、にはかに雲隠れぬと聞きしにも、かこつ方なかりしままに五部の大乘経を手づから書きて、おのづから水茎の跡を一卷に一文字づつを加へて書きたるは、必ず下界にていま一度契りを結ばんの大願なり。いとうたてある心なり。この経書写は終りたる。供養をとげぬは、このたび一所に生れて供養をせむとなり。(341~2頁)

と語っている。すさまじい妄念というほかないが、ここに見える「形は世々に変るとも」「下界にていま一度契りを結ばん」ということばが注目される。巻一、作者が院の寵愛人となるころにも「かたちは世々に変るとも契りは絶えじ。あひみる夜半はへだつとも心のへだてはあらじ」(197頁)と、院の誓いのことばとしても見えており、院・有明の真意が告げられているといえそうである。というのも、このことばにははっきりした典拠があるらしく、ある意味あいがかもっていると考えられるからである。その典拠とは散佚した『長恨歌』という絵物語のことである。周知のように、『長恨歌』が絵をともなって享受されていたことは『伊勢集』<sup>(20)</sup>、『源氏物語』桐壺巻(163頁)、同絵合巻(272頁)、『夜半の寝覚』巻三(204頁)などに明らかであり、『更級日記』<sup>(21)</sup>によれば「世の中に『長恨歌』といふ文を、物語に書きてあ」(26頁)ったこともはっきりしている。恐らくは『源氏物語』より以前の成立であろうが<sup>(22)</sup>、本文の痕跡はまったくのこっていないようである。ただ、『長恨歌』の内容を仮名文で綴ったものとして『俊頼髓脳』(240~4頁)や『今昔物語集』<sup>(23)</sup> 卷十・第七話(283~6頁)の系統と、『唐物語』<sup>(24)</sup> 第十八話の系統とがある。そのうち、『唐物語』の話のほうには、

初秋の七日のゆふへ驪山宮にみゆきし給ひて、たなばた・ひこぼしのたえぬ契りをうらやみ、はかなきこの世の別れやすき事をぞかねてなげき給ひける。「かたちは六つの道にかはるとも、あひみん事はたゆる時あらじ」と契らせ給ひても、

すがたこそはかなき世々にかはるとも契りはくちぬ物とこそきけなど宣ひつつ、御手をとりかはして涙をながし給ひけるを……(35~6頁)

また、

帝、我に立ちそひて宣ひき。「天にあらばはねをかはず鳥となり、地にあらば枝をまじふる木

とならん」と。これ君よりほかに又知る人なし。この契りかぎりなきによりて必ず下界に生れて、さだめて二度あひ見てむつまじき事古きがごとくならむ。我この事をかねて知れり。(45~6頁)

とあり、私はこちらを散佚(ということになっている)『長恨歌』の物語に擬したいのである。『御津の浜松』が成立した背景に『長恨歌』や『あま人』(『風葉和歌集』『宝物集』所載)<sup>(25)</sup>の物語を想定したいからであるが、このことはいずれ別の機会に論じようと思う。念のため、『白氏長慶集』<sup>(26)</sup>巻十二の「長恨歌伝」「長恨歌」から参考となる本文を引くと、

仰天感牛女事、密相誓心、願世世為夫婦…(中略)…由此一念、又不得居此、復墮下界、且結後縁、或为天、或為人、決再相見、好合如旧(279頁)

また、

但令心似金鈿堅、天上人間会相見…(中略)…在天願作比翼鳥、在地願為連理枝(283頁)

となっており、なお『我が身にたどる姫君』<sup>(27)</sup>巻七に、新帝(三条院一宮)が叔母皇太后を慕って忍び入り、皇太后が病臥・剃髪・崩御されると帝も病臥・崩御される、その御臨終の場面にも、

「むなしきからなりともかの御あたりにおかせ給へ、わがさきの世の十善の力、かならずつきざらん。あらぬ世にすがたはかはるともかの御身をはなれじ」と宣はせて、つひに絶えはてさせ給ひぬ。なにの御祈りもかひなしとぞ。(407頁)

とふまえられている。「かたちは世々に」「下界にていま一度」云々ということばは見られるように、玄宗皇帝と楊貴妃との故事にちなんで二世以上の夫婦の契りを約したものであって、院・有明は口約したけれど曙・大殿は誓わなかったなどという事実問題なのではなくて、作者が「のがれぬ(御)契り」と思わざるをえなかった相手の誓いのことばとして重要な意味をもっていたのである。

では次に、作者にとって運命的としかいいようのない偶合が度重なったさまを見ていこう。まず、作者がはじめて有明と契ったところに注目すると、有明は院の延命供に途中から請じられて「御撫物を持たせて、御時はしまらんほど聴問所へ人を賜はり候へ」と申し出て、「御衣を持ちて聴問所に参れ」との院の仰せで出向いた作者に抱きついているのであって、作者はむしろ「やがて(有明ノ御修法ノ)始まるさまは、何となく清まはり給ふらんとも覚えねばいとおそろし」と思い、しばしば逢うにつけても「このたびの御修法は心清からぬ御祈誓、仏の御心中もはづかし」く、「よしなき思ひもかずかず色そふ心地」がしたという(272~5頁)。院の御使いで有明と契らされることとなり、この三人に仏罰があたりはしないかと恐ろしいというのである。それからちょうど一年後<sup>(28)</sup>、有明に仲媒を頼まれて「まめやかに同じ心に思ふべき事と思」いこんだ隆顕のはからいで逢うが、作者は絶交を決意してつれなくあしらい、「公事にことづけて急ぎ(御所ニ)参りて局にうち臥したれば、まめやかにありつるままの面影のそばに見え給ひぬるも恐ろしき」思いをあじわう(281~2頁)。年末、有明の起請文を同封した隆顕からの手紙には、「あながちにいとひ申さる事にて候はず、しかるべき御契りにてこそかくまでも思し召ししみ候ひけめに、情なく申されかやうに苦々しくなりぬる事、身一つの嘆きに覚え候ふ。これへも同じさまには、返すがへす恐れ覚え候ふ」(283頁)とあった。作者は有明を幻覚に見て恐れ、隆顕は有明の恨みを負ったの後難を恐れるのである。翌春、院に新年の挨拶に参った有明と対面することになり、「御所「御酌に参れ」と仰せ有りしに参るとて、立ちざまに鼻血たりて目もくらくなりなどせしほどに、御前を立ちぬ。そのち十日ばかり如法大事に病みて侍りしも、いかなりける事ぞと恐ろしくぞ侍りし」(285~6頁)という。その後、作者は女楽の席次のことで外祖父四条隆親と衝突して院のもとを出奔し、

つくづくと案ずれば、一昨年(の)春三月十三日に、(有明カラ)はじめて「折らでは過ぎじ」と

かや承りそめしに、去年の師走にや、おびたしき誓ひの文を賜はりて幾程も過ぎぬに、今年の三月十三日に、年月候ひなれぬる御所のうちをも住みうかれ琵琶をも長く思ひ捨て、大納言(父)かくれて後は親さまに思ひつる兵部卿(隆親)も快からず思ひて、「我が申したる事をとがめて出づるほどの者は、我が一期にはよも参り侍らじ」など申さると聞けば、道とちめぬる心地して、いかなりける事ぞといと恐ろしくぞ覚えし。(294頁)

と思ひ、やはり父隆親と衝突して籠居した隆顕と対面して、隆顕から「いつしか御身といひ身といひ、かかる事の出できぬるもまめやかに報いにやと覚ゆる」(297頁)と聞かされる。ここでもまた、作者は有明にはじめて言い寄られてから三年目に入る同月同日の災難に恐れをいただき、隆顕は二人の災厄を有明につれなくした報いと受けとめているのである。やがて、作者は曙・隆顕のはからいで院に迎え取られるが、曙が引き取って養育している女兒に対面した折にも、ふと有明のことを思い出して、「かやうの二心ありともつゆ知らせおはしまさねば、心より外にはと思し召すぞいと恐ろしき」(305頁)と背筋を寒くする。また、伏見御所での今様伝授の酒宴の折、

「相応和尚の破不動」かぞゆるに、「柿の本の紀僧正、一旦の妄執や残りけん」といふわたりをいふ折、善勝寺きと見おこせたらば、我も思ひあはせらるるふしあれば、あはれにも恐ろしくも覚えてただ居たり。(311頁)

ということがあった。巻三にはいって早々、今御所(院皇女、のちの遊義門院)の御惱の祈りに有明も召され、「いつよりもどやかなる(院・有明ノ)御物語のほど、(作者モ)候ふも(有明ノ)御心の中いかがと恐ろし」(315頁)く思う。

もちろん、作者の有明との関係についての叙述はもっと豊かな内容をもっているのであって、たとえば次田氏「解説」(74~6頁)からことばを拾って綴るならば、対有明の態度が「まだ心が動かず」「やや興味を以って観察」する段階から、「積極的な心が動いて」「遊戯的享乐的な分子」を見せるように変化し、院に許されたのちは「有明の情熱に引きずられていった」ということや、院の立場と言動が作者の身動きを大きく梃づけているさま、また「禁欲の世界に住んでゐた有明」の「あまりに生真面目な執心」が「情熱を燃やし尽し」て破滅する過程など、「作品中、内容形式共に最も濃密な部分をなしてゐる」のである。しかしながら、作者がこれを「のがれぬ契り」として丹念にかたどっていることも見のがしてはならない。ここまで見てきたところでは、ひとつのキーワードとして「恐ろし」があり、作者が有明の愛執の念に次第に呪縛されていく過程をたどることができた。こののちは、すでに叔父隆顕が「しかるべき御契り」(283頁)と述べていたところを、有明・院・作者がそれぞれに確認して、「力なき御宿世のがれざりけること」(院詞、324頁)、「昔の契り浅からでこそかかる(二人ノ間ノ子トシテ生レル)らめ」(有明詞、340頁)などと語ることになるのである。

## 注

- (15) テキストは阪倉篤義・日本古典文学大系『夜の寝覚』岩波書店による。
- (16) テキストは松尾聰・日本古典文学大系『浜松中納言物語』岩波書店による。
- (17) テキストは松村博司・石川徹・日本古典全書『狭衣物語上(下)』朝日新聞社による。
- (18) たとえば次田氏「解説」(119~23頁)や、松本寧至・角川文庫『とはすがたり上(下)巻』の脚注・補注などに詳しい。
- (19) 長野嘗一「とはすがたり」の文芸的考察」国語と国文学・昭和38年9月参照。
- (20) テキストは和歌史研究会『私家集大成・中古I』明治書院による。その51伊勢II・54~63など。
- (21) テキストは西下経一・岩波文庫改版『更級日記』による。
- (22) 久松潜一『新版日本文学史2・中古』至文堂所収、寺本直彦「散佚物語」(後期・第二章・五)参照。
- (23) テキストは山田孝雄他・日本古典文学大系『今昔物語集一(~五)』岩波書店による。
- (24) テキストは池田利夫『唐物語校本及び総索引』笠間書院による。
- (25) テキストはそれぞれ中野莊次・藤井隆『増訂校本風葉和歌集』友山文庫(雑3・1353)、吉田幸一・小泉弘『宝物集九冊本』古典文庫(六・325頁)による。ただし、「アマノ物語」は九冊本には欠けていて、同系

統の古写抜書本である身延山久遠寺本によって補われたところである。

㉞ テキストは『白氏長慶集上(～下)』芸文印書館による。

㉟ テキストは金子武雄『物語文学の研究』笠間書院による。

㊦ 有明とはじめて契ったのは「九月の八日よりや、延命供はじめられて七日過ぎぬる」(272頁)のち、十四・五日のことであり、出雲寺辺で逢ったのは翌年「九月の中の十日あまり」(281頁)というが、恐らくは同月同日のことであろう。このような月日の符合の不思議については、作者はこのほか気にとめていたらしく、有明からはじめて恋をうちあげられた翌々年の同じ三月十三日に、女楽事件で院のもとを出奔する破目になったこと(294頁)、人丸影供をつとめた翌春の同じ三月八日に、院の忘れ形見遊義門院と邂逅してお近づきになったこと(巻五・460頁)、などの例が明言されている。

#### (補記)

前稿「年のかぎりの対面」については、先輩・友人達より批評を忝うしたが、尻切れトンボであるとか、叙述の順序を改めた方がよいとかいう注告があったにもかかわらず、本稿もまた前稿そのままのスタイルとなってしまった。ここで二・三弁解しておきたい。標題を第一部において見出しとしたのは、『とはずがたり』の研究者にかぎらず、広く物語・日記の研究者の目に触れるようにしたかったからで、論旨をすっきりしなかったことでは後悔していない。尻切れトンボであるのは恥ずかしいことであるが、いちおうの区切りはつけたつもりであって、それは次のような理由による。私は『とはずがたり』の作中人物論を展開するためには、物語や説話・伝説・歌語り・世語りの伝統に通暁しておく必要があると思っている。たとえば雪の曙を論じるならば、「帝の御妻をあやまつ物語」(石川徹『古代小説史稿』刀江書院・374頁)を軸として、説話集・歌論書・歴史物語における「女御・内親王などの生きざま、また複数の男性に身をまかせてしまう『源氏物語』の浮舟や『御津の浜松』の大貳女のような中流女性のありよう。あるいは反対の「女の幸の物語」(小木喬『鎌倉時代物語の研究』東宝書房・271頁)などを見渡したうえで、まずその人物造型や個々の場面心理を読みさだめておかねばならないであろう。有明の月の像をはっきりさせるためには、「法師に近づく物語」という背景が見極められていなければならないであろう。『とはずがたり』の作者は我が人生を運命の相においてたどりなおしているのであって、あらかじめ登場人物相互の位置づけをすませてから執筆にとりかかったものと想像される。とはいえ、そういう人物が木偶人形に終わってしまうとはかぎらず、むしろ事実とか他我という位置づけへの強い抵抗が生命ある人間像を刻みあげている。のみならず、せめぎあいを止揚するよりどころとして、また作者自身を対象化する際のなぞりかたどる鑄型として、物語・説話類に語られている人物・事件があったと思われるのである。前稿や本稿の作業はまだ作品の構成を確かめるという段階にとどまっており、作中人物論への飛躍は後の機会をまちたいとう。

昭和52年7月11日受理)

(昭和52年10月14日分冊発行)